おせっかいのススメ

松江市社会福祉協議会

表紙絵タイトル「伴奏」　　　落合　正和

- 伴奏 -

主旋律を奏でるのはご本人。
そのそばで楽器を奏でるのは、その人を支える人たち。それらが合わさってひとつのハーモニーが生まれます。

「からっぽのコップに愛を注ぐ」抱樸の奥田知志氏のお話から松江をイメージして、描かれました。愛が空から降り注がれています。

目　次

「困っている人にこそ、おせっかいを」・・・・・・・・・・P4　－ P5

こんな「おせっかい」があったらいい！・・・・・・・・・P6　－ P9

やっぱり「おせっかい」が必要！・・・・・・・・・・・・P10 － P11

奥田さんからのメッセージ ・・・・・・・・・・・・・・P12 － P13

おわりに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P14 － P15

「困っている人にこそ、おせっかいを」

本冊子は、松江市で暮らす皆さんに「『おせっかい』をしてみませんか」と勧めるために作成されました。地域で生活する人々をめぐる、４つの事例（お話）が描かれています。これを読むと「ああ確かにこれはおせっかいだな」ということが実感していただけると思います。

私は、最初にこの４つのお話を読んだとき、共通した話型があるのではないかと感じました。まず、主人公のいずれもが生活上の困難を抱えています。しかし、どの人も「人に上手く頼れない」のです。もしくは、他者からの気遣いを拒否します。次に、拒否された周囲の人々はどうするか。「そうですか。ではもう関わりません」とは言いません。ふとしたときに手助けに現れます。何とかしようと声をあげます。頼まれてもいないことをするのです。つまり、「おせっかい」を焼いているのです。

お話の冒頭、人に頼れない主人公が登場すると言いました。このとき、主人公はどう考えているのか。おそらく「他人に迷惑をかけてはいけない」「人の手を煩わせてはいけない」というようなことでしょうか。かつて「人様に迷惑をかけてはいけない」という言葉を、年長者から聞かされたという方は多いかもしれません。この言葉を内面化して行動することが、私たちの社会の規範になっているのかもしれません。

一方で、私たちは、ちょっとした気遣いとか頼まれてもいないことをする文化を持っています。たとえば、「おすそわけ」がそうです。煮物をたくさんつくりすぎた、実家でとれたミカンがたくさん届いた。そうしたときに近隣の人に配ります。関西だったら女性（この場合、親しみを込めて「おばちゃん」と言います）が、席が隣り合った見知らぬ人に飴玉をあげるのもその一つかもしれません。他地域の方は冗談と思われるようですが、私も子どもの頃から（大人になってからも）何度もいただきました。

しかし、これらの振る舞いと、事例のおせっかいとは、やや異なるところがあります。事例のおせっかいの特徴は、「困ったとき」に手を差しのべていることです。最近、内閣府の調査を目にしました。「おすそわけをするような近隣とのつきあい」がある人は、４割以上に及びます。ですが「困ったときに相談できる近隣の人」がある人となると、１９％程度に下がります。つまり、私たちは、元気なときには楽しく近隣づきあいをします。ところが、「困ったこと」が生じたときは、近隣の人に相談することを遠慮する傾向にある。そういうことをこの調査は示しています。

翻って４つの事例はどうでしたでしょうか。身近な人が困ったときに（拒否をされても）、ちょっとした行動、ちょっとした一言がみられました。自分のできる範囲で、一歩踏み出して他者と関わってみる。私自身、そうしたことが、人にとっても地域にとっても大切だということを、この事例から学ばせていただきました。本冊子によって、小さなおせっかいが松江市のあちこちに芽吹くことを期待しています。

島根大学人間科学部　准教授　加川　充浩　氏
（松江市社会福祉審議会委員長）

ストーリー１

「安達さんは元気にしとるかね」

安達さん（５５歳、男性）は、仕事をリストラされてしまいました。そのことがきっかけで夫婦関係も悪くなり、離婚せざるをえなくなりました。そして、妻と子どもと一緒に過ごしたアパートを出ることになりました。住むところに困った安達さんは、ネットカフェや野宿をして何とか過ごしていました。しかし、貯金も底をつき、なんとかしなきゃと思い、ハローワークに仕事探しに行きました。本人は、うつ状態になっていることに気づいていませんでしたが、相談を受けたハローワークの相談員は安達さんの様子から仕事よりも「今は、まずしっかり受診をした方がいいのではないか」と「松江市くらし相談支援センター」を紹介されました。

安達さんには、１０年以上帰っていない実家がありました。既に親は他界し、今はだれも住んでいません。庭は荒れ放題で、以前、隣近所の方から庭の草刈りや隣の家まではみ出している木々について「何とかしてくれ」と連絡がくることもありましたが、なにも対応していませんでした。そのことの負い目があるためか「実家には帰れない」と。

くらし相談支援センターの相談員と松江市社会福祉協議会（以下、松江市社協）コミュニティソーシャルワーカー（ＣＳＷ）が実家に行ってみると、確かに家は荒れ放題ですが、掃除をすれば住めなくはない状況でした。帰りに自治会長に挨拶に行くと、「安達さんは元気にしとるかね」と心配をしてくださっていました。自治会長によると、確かに地域の中では、荒れ放題の庭の状況等、安達さんのことをよく思っていない人もいるとのことでした。そして、自治会長さんが近所の人に「ちょっと聞いてみてみるわ」と言ってくださいました。数日後、自治会長さんから連絡があり「安達さんが近所に一軒一軒あいさつに回ったほうがいい、わしがみんなには下話しといたけん」という提案がありました。

安達さんに自治会長の提案について報告すると、あいさつはしたいけど、一人では自信がないということだったので、ＣＳＷが一緒に同行することにしました。厳しいことを言われた方もおられましたが、中には「どうしちょったかね」と心配をして声をかけてくださる方もおられました。このあいさつまわりをきっかけに、安達さんは実家に帰ることを決意されました。

１週間後、安達さんの実家の大掃除を行いました。松江市社協の職員も手伝いながら、大きな荷物を家から出していると、突然、草刈り機を持った男性が現れました。「草が伸び放題だけん、キレイにしておかんとね」。地域の民生委員さんでした。大掃除が始まっていることをどこかで聞きつけ、自ら草刈りを買って出て下さったのです。やっとで片付けが終わろうとしていると、安達さんは用意していた缶コーヒーを恥ずかしそうにお礼を言いながらみなさんに配っておられました。

数ヶ月後、実家での生活にも慣れた安達さんは、自分も今度は皆さんの役に立ちたいと、地域の「なごやか寄り合い事業」のボランティアを始められました。

ストーリー２

「わたしは福祉の世話にならないわ、いつ死んでもいいの」

佳代子さん（７０歳、女性）は、とてもプライドの高い人でした。多少困ったことがあっても、人に頼らず、アパートで一人暮らしでした。そんな佳代子さんを独居高齢者として気にかけていた民生委員は、ここ最近、佳代子さんの姿を見かけなくなったことを心配していました。訪問すると佳代子さんは元気がない様子でした。受診や福祉サービスを受けることもずーっと拒否されたため、このまま放っておけないと地域包括支援センターに相談をされました。地域包括支援センターの相談員が何度も、何度も、受診やサービスの利用について働きかけましたが、「わたしは福祉の世話にも人の世話にもならないわ、いつ死んでもいいの。あなたたちは信用できない。もう放っておいてください。」と、頑なに断られました。その後も訪問し、声をかけても、返事をされることはありませんでした。地域の民生委員、福祉推進員も何度訪問しても全く反応がなく、地域でも孤立している状況でした。

そんなある日、新聞受けに新聞がたまっていることに気づいた新聞配達員の方が地域包括支援センターに通報しました。通報を受けた地域包括支援センター相談員とＣＳＷと一緒に訪問してみると、部屋の中に人の気配はあり、唸り声のような声が聞こえていました。そこで、大家さんと相談し、中に入ることにしました。部屋の中では、佳代子さんが倒れていて救急車を呼んで、即入院となりました。

数ヶ月後、退院することになりましたが、末期のがんということでした。相変わらず、福祉サービスを受けることは拒否しておられますがなんとか一人暮らしを続けておられます。ただ、少し変化がありました。地域包括支援センター相談員、ＣＳＷ、民生委員の訪問には拒否されることはなく、部屋に上げてくれるようになったのです。

そして、佳代子さんの心にどんな変化があったかわかりませんが、地域包括支援センターの相談員、ＣＳＷ、民生委員の訪問に対し「あんたたちも大変だねぇ」「ご苦労さん」「また今度」と声をかけてくださいます。また、隣の部屋の男性とも「これまで挨拶なんてしたことなかったけど、この前スーパーで会って挨拶したら、あっちも恥ずかしそうにお辞儀だけしちょったわ。」と笑われました。後日ゴミ出しをする佳代子さんに、隣の男性が無愛想ながらも「ついでだから。」とゴミ袋を運んでくれたそうです。

佳代子さんは相変わらず一人で気ままな生活を送っておられますが、その顔には穏やかな笑顔が見られるようになりました。

ストーリー3

「社長！聡くんにもう一度チャンスをやってください」

聡くん（２２歳、男性）は、小学校の時からすぐに友達とけんかになってしまったり、親にも自分のことを理解してもらえない、計算ができない等の生きにくさを抱えていました。担任の先生から特別支援学級をすすめられていましたが、ご両親は、それを拒否していました。中学生の頃には、両親が離婚してしまいました。そのことからか、さらに生徒間のトラブルに巻き込まれることも多くなり、警察に補導されることもしばしばありました。中学校卒業後、仕事につくことはありましたが、仕事上での人間関係でのトラブルも多く、定着することは難しく、転々としていました。

そんなある日、一緒に住んでいた母親から「再婚したいので、家を出て行ってくれ」と告げられます。友達の家を転々としたり、野宿をしたりして生活していましたが、空腹に耐え切れず、スーパーマーケットでパンを万引きしてしまいました。

検察から釈放はするが、支援をお願いしたいと、くらし相談支援センターに連絡が入りました。母親からは、引き取りを拒否されたため、松江市社協が運営している一時生活支援事業を活用し一時的な住まいを確保しました。その後、松江市社協が保証人になってアパート探しを行い、新しい生活がスタートしました。

次は、就労支援です。これまで、なかなか仕事が定着しなかったことから、就労準備事業を活用し、就労支援員の支援を受けながら「職場体験」から実施しました。職場体験では、事業所のみなさんが聡くんの「生きづらさ」を理解して丁寧な支援をしてくださいました。職場体験の評価も高く、引き続き、事業所の社長から採用したいという申し出があり、正規職員という身分で採用されることになりました。

しかし、１か月後、突然、無断欠勤で仕事を休んでしまいました。事業所の人が連絡しても、つながりません。くらし相談支援センターの就労支援員が連絡してもつながりません。心配になり、就労支援員が訪問してみると、アパートで一人うずくまっていました。話を聞くと職場でのちょっとした人間関係が原因だったようです。

その日に就労支援員同席で、社長さんに謝罪に行きました。社長さんは、本人を信用していたのに裏切られた思いが強く、大変ご立腹で「もうやめてもらう」と言われました。すると、一緒に働いていた先輩の一人が「社長！聡くんにもう一度チャンスをやってください」と、泣きながら訴えてくれました。聡くんも先輩の思いが心にしみたようで、一緒に泣いていました。

この日を境に、聡くんはもう無断欠勤することなく、働き続けています。

があったらいい！

ストーリー４

「やっぱり、私たち善太郎さんの家に行きます」

善太郎さん（８２歳男性）は、５年前に奥さんを亡くしてから一人で暮らしていました。若いころは仕事熱心で、誰からも信頼されるまじめな人でした。また忙しい仕事の合間には、自治会の役員を引き受けたり、地域活動にも協力してきた方です。特に退職後はご近所の方たちとも親しく付き合い、ご近所の方たちもおすそ分けをもっていくなど、いつも善太郎さんを気にかけてくれています。

一人息子の昭雄さんは、松江市内の高校を卒業後に神奈川県の大学に進学し、東京で就職をしています。今は結婚し、奥さんと娘さんの３人で暮らしています。松江にはお正月に昭雄さんだけが帰省して数日滞在するくらいで、普段は週に１回善太郎さんに電話をして安否を確認しています。

昭雄さんがいつものように善太郎さんに電話をすると、少し様子がおかしいことに気が付きました。善太郎さんに最近の様子を聞いても、あやふやな返答しか返ってこないのです。年相応の物忘れかなとも思いましたが、やはり心配になりました。そこでインターネットで松江市のケアマネジャー事業所を調べ、介護保険の申請をすることにしました。介護保険の申請の結果、善太郎さんは「要介護１」の認定になりました。身体は元気なのですが、受診の結果アルツハイマー型認知症と診断されたのです。

昭雄さんは善太郎さんに介護保険サービスを利用させるために、松江に帰ってきました。ケアマネジャーと相談し、デイサービスとホームヘルパーの利用をすることになりました。その後昭雄さんはご近所の家を回り、「皆さんには大変良くしていただいて、ありがとうございました。父は介護保険サービスを利用することになったので、もう皆さんに来ていただかなくて結構です。」と言って歩かれました。ご近所の皆さんはこの言葉に戸惑い、もう善太郎さんの家に行ってはいけないのだろうかと思いました。これを聞いたケアマネジャーは、「介護保険サービスは、善太郎さんの自宅での生活のすべてをカバーなんてできません。認知症の善太郎さんを支えるには、ご近所の協力は必要です。これは何とかしなければ！」と地域包括支援センターに相談しました。

地域包括支援センターは、ご近所の皆さんに集まってもらい、これからどうするべきか話し合いました。ご近所の方には、「息子が行くなというなら、もう私たちは行けないわ！」と言う人もいます。しかし一方で「遠くの家族よりも、頼りになるのは近くの他人。何とかならないかな。」という声も聞こえました。みんなで話し合いながら気持ちを整理して導いた結果は、「善太郎さんが受け入れてくれるのなら、やっぱり私たち善太郎さんの家に行きます。」というものでした。「善太郎さんとはこれまで親しくしてきたのに、これからは知らん顔なんてできないでしょう。」という言葉が決め手でした。

この後も、善太郎さんとご近所のお付き合いは続きました。数年後に善太郎さんの症状がすすんだことで施設入所となるまでは、住み慣れたまちで生活が出来たのです。善太郎さんが施設に入所した後、昭雄さんはふたたびご近所の家を歩かれました。「皆さんのおかげで、父はここまで一人暮らしを続けることが出来ました。お付き合いをしていただいて、本当にありがとうございました。」という昭雄さんの言葉を聞いて、ご近所の皆さんは胸のつかえがスッと消えた気がしました。

やっぱり「おせっかい」が必要！

４名のケースからみえた「おせっかい」はどんなことでしょうか？考えてみたいと思います。

４名のみなさんは「おせっかい」によって生きる元気を取り戻されました。

ストーリー１　安達さんは失業、離婚、うつ状態、野宿の状態でした。荒れ果ててしまった実家には帰れないと思っていた安達さんに対して、自治会長さんは「安達さんは元気にしとるかね」と気にかけてくれていました。また、自治会長さんが間に入って近所に安達さんを連れて挨拶に回ってくださいました。こんな自治会長さんの「おせっかい」が安達さんの心をほっとさせ又、もう一度頑張って生きてみようと思わせたのではないでしょうか？

ストーリー２　佳代子さんは「いつ死んでもいい」と福祉のサービスを拒否され、地域でも孤立した状態でした。たまたま新聞配達員に倒れた佳代子さんを発見してもらいました。その後、佳代子さんの気持ちに変化が起こりました。民生委員や、地域包括支援センター、CSW の職員の訪問を受け入れて下さるようになりました。佳代子さんから「あんたたちも大変だねぇ」とねぎらいの言葉をかけて下さるようになりました。新聞配達員の「おせっかい」が引き金になり、今は地域の皆さんの声掛け「おせっかい」を受け入れて下さっています。

ストーリー３　聡くんは人間関係のトラブルを抱え、家族ともうまくいかない状態でした。仕事も長続きしませんでした。逮捕後釈放されもう一度やり直したいと思った聡くんでしたが、仕事の人間関係で些細なことで再び躓いてしまいました。無断欠勤が続き解雇寸前だった聡くんのことを「もう一度チャンスをやってください」と仕事仲間が社長に訴えてくれました。仲間の「おせっかい」が聡くんを再び立ち直らせてくれました。

ストーリー４　善太郎さんは誰からも信頼される人でした。アルツハイマー型認知症になられたことで、息子さんは「地域の皆さんに迷惑をかけてはいけない」と思われました。しかし、これまで一緒に過ごしてきた地域の皆さんは善太郎さんのことを心配され、お付き合いを続けていきたいと思われました。介護保険が入ったとしても「善太郎さんとはこれまで親しくしてきたのに、知らん顔なんてできないでしょう」と。これこそが「おせっかい」ではないでしょうか？近所の人の「おせっかい」は、これまで地域のために尽くしてこられた善太郎さんにとってどれだけ嬉しかったことでしょう。

そもそも「おせっかい」とは迷惑なことでしょうか？今の時代、地域では、「個人情報の問題」があるからと、人との関わりを避けている人が増えているのではないでしょうか？その背景には「他人のことにあまり干渉しない」現代の風潮があります。お互いを尊重することは、一方で、「無関心」を良しとする世の中を作ってしまうことにもなりかねるのではないでしょうか？自分は親切のつもりで声をかけたことが、相手にとっては「余計なおせっかい」と迷惑に思われたかもと不安になるときもあります。でも、「困っていそうな人」や「お手伝いが必要そうな人」を見たときに「大丈夫かな？力になりたいな」という気持ちは自然にわきあがってくる気持ちです。

あなたがもし、「相手のため」と思ったら、まず行動に移してみませんか？

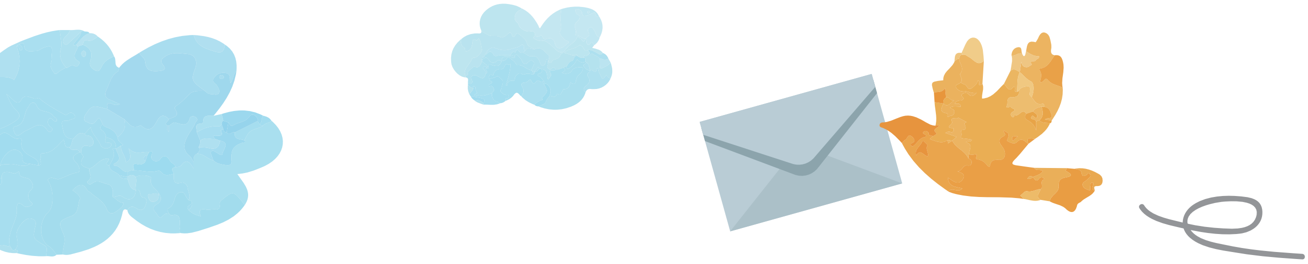
ＮＰＯ法人抱樸
理事長 奥田知志さんからのメッセージ

　私たちの活動は、ホームレスの支援から始まり、困窮者、刑余者、そして子どもの貧困など多岐に渡っています。今年で３０年になります。

　数年前から「子ども･家族まるごと支援プロジェクト」をはじめました。これは家庭訪問をベースに子どもたちの学習支援と親の支援を実施するものです。ある家庭はゴミ屋敷状態でした。「親なら、子どもの面倒をみなさい」と多くの人は言います。しかし、実は、そのお母さんも子どもの頃、育てられていないということが多いのです。自分がやってもらっていないことを、誰かにするのは難しいのです。

　ある日、１７歳の女の子が私達のところにたどりつきました。彼女は、児童養護施設で育ち、高校に行けずに１５歳で施設を出て１６歳で結婚しました。ところがその後、結婚相手の暴力に遭い、それを逃れるように北九州に戻ってきました。お腹には赤ちゃんがいました。すぐに居宅を準備し、その後、無事に出産しましたが、子育てを全然してもらってない子なので、やはり育児には苦労していました。

　その後、新しい彼氏ができ、その彼氏がお金を取ってしまうということが起こりました。ガスが止ったと聞いて、私が「児童虐待だ」と激怒すると、彼女は「虐待なんかしてない」と言いました。その後NPOのスタッフに「私は、子育てなんか一回もしてもらったことがない。その私に虐待だって言う理事長はおかしい。怒るんだったら母親を怒って。私があの母親から学んだのは万引きの仕方だけ」と言ったそうです。切ない現実です。翌日彼女を訪ね、「君の言うことはすべて事実。しかし、このままだと、１０年後、君の息子が警察に捕まり、そしてこう言う。『俺は、ガスも出ないような家で育てられた。万引きぐらいしても当然。怒るんだったら母親を怒れ』と。ここでこの連鎖を止めなといけない」と伝えました。その後も山あり谷ありですが、いま息子は小学３年生になり、彼女は再婚し二人目の子育て中です。



愛情とはコップの水みたいなもので、何も入ってないと人にあげられません。まずは母親のコップを満たしてあげないといけない。どんどん愛情を注ぎ、いずれ溢れる。その溢れた分が周りの人を潤すのです。コップが空っぽか満たされているのかを確かめないで、「あの親はダメだ」と言っても始まらないのです。

では、このコップに愛と言う水を注ぐのは、誰でしょうか。元の親にはなかなか期待できません。そうであれば、誰でも良いのです。それがこれからの地域の役割となります。いつまでも「家族幻想」にしがみつき、自己責任、身内の責任と言って、社会が無責任であり続ける言い訳をするのではなく、新しい共生社会の創造が必要です。松江市社会福祉協議会の働きに期待しています。

奥田知志さんについて

奥田さんは北九州を中心に、自立支援施設を運営され、北九州で活動開始後 30 年で 3200 人以上のホームレスを自立へと導き、自立継続率も９割以上という驚異的な実績。

ホームレス支援全国ネットワーク代表等も務め、NHK「プロフェッショナル仕事の流儀」に２度出演。

おわりに

孤立死で亡くなってから何日もたってから発見されたり、認知症の未帰宅高齢者が亡くなってみつかる、地域の中で子どもが虐待される・・・こんなことがあとを絶ちません…

まわりに関心を持たない人が増えているのではないでしょうか？個人情報の保護ということが声高に言われるようになり、他人のプライバシーには干渉しないということはわからないでもないですが、苦しんでいる人、悲しんでいる人、困っている人に対しても「無関心」である地域ということはとても寒々しい社会ではないでしょうか。

マザーテレサは「愛の反対は、憎しみではなく、無関心です…」と

ちょっとした困りごとにちょっとした手助け、ちょっとした声かけがあるだけで、守ることができるのに、それがないために「生きづらさ」が増幅し、不幸に陥らなければならないとすれば悲しい地域です。

「おせっかい」とは、求められていないのに余計なお世話や口出しをすることです。その行為は、人からは嫌われる行為でもありますが、ただ、そのちょっとした行為があれば、救われる人がいるのであれば、それをしなくなってしまう社会の方がより恐ろしい社会ではないでしょうか？「ほっとけない」「このままにはしておけない」という素直な気持ちから生まれる「心の分かち合い」が必要ではないでしょうか？

人と人との適度な関係性は、その街を住みやすくすると思います。「おせっかい」が存在する街の方が、それがない街よりも住みやすいはずです。

地域の人間関係は、急激に希薄化し、「向こう三軒両隣」という古き良き地域社会は崩壊の一途を辿っています。そこで、頼りにしたいのは家族ですが、２０４０年には、単独世帯の割合は４０％に達すると予測されています。頼ろうにも頼れる家族がいないのです。

かつての日本人は、他人の「おせっかい」を受け入れ、その中で人とのかかわりや心の分かち合いを学んできたのではないでしょうか。

「無関心」

それは、人としてとても大切な「心を分かち合うこと」ができなくなることです。
人とのかかわりを持つことを忌み嫌う街。困っている人がいても、見て見ぬふりをする街。そんな街で育った子どもは、どんな価値を持ち、どんな大人になっていくのでしょうか。困っている人がいたら「大丈夫だろうか？」と思い、当たり前に声をかけあう街。

私たちは、当たり前に声をかけられる自分自身でありたいし、そういう街で子どもたちを育てたいと思います。

松江市社協では「社会的孤立予防」プロジェクトを立ち上げ取り組んできました。社会的孤立防止研修や地域共生のためのフォーラムに参加して頂いた後のアンケートから多くの市民の皆様の声をいただきました。「傷つくことを恐れずに関わっていければと思いました」「助け、助けられる社会をつくっていくために自分が何かできるのか、どのような地域につないでいったらよいか考えていきたいと思います」等たくさんの声が寄せられました。松江には確かな「地域力」があることを再認識しました。松江市社協では、地域の皆様と共に「おせっかい」であふれる心豊かな松江をつくっていくことができればと考えています。

この「おせっかいのススメ」が、今一度、身近な地域での人と人とのつながりを考える機会になれば幸いです。

発行
おせっかいのススメ
松江市社会福祉協議会　「社会的孤立予防プロジェクト」
〒６９０－０８５２　松江市千鳥町７０番地　生活支援課
平成 31 年 3 月